

# D.H. Lawrence: 小説に現われた女性 (その6)

—Lady Chatterley's Lover を中心に—

石田 美栄

## I

ロレンスは書簡の中で “I shall always be a priest of love...”<sup>1</sup>と述べて、愛の問題、両性関係の問題は、ロレンスの作品の世界の重要な部分をなしている。筆者はそのうちでも、長編小説に現われてくる女性像に視点を置いて研究を重ねてきた。

ロレンスが創作活動初期の1912年に Sallie A. Hopkins に宛てた手紙で、 “I shall do a novel about Love Triumphant one day.”<sup>2</sup>と書いていることが、*Sons and Lovers*, *The Rainbow*, *Women in Love*, *Aaron's Rod*, *Kangaroo*, *The Plumed Serpent* と6つの長編小説を経て、最後の小説 *Lady Chatterley's Lover* で結実したのである。そしてまた、ロレンスの作家として、男としての夢があらゆる角度から込められている。それは、英国を愛する気持、上流階級への憧れから階級の差をも起えられる男女の結びつき、自分の死を予知しての人間性の復活や生命感、男女関係に生殖関係の復活、男性の成就などである。

*Sons and Lovers* は自己達成に出発する一人の男の誕生、*The Rainbow* は女性解放の三代記による、自我を求める女性の誕生、そしてここに生れた男女が会って、愛の理想を追求してゆくのが *Women in Love* である。その理想追求の過程に、ロレンスの女性観の行き止まりをみると共に、男性同志の結合と男性優位の主張がはっきりと見えてくる。続く三つの作品では場所を移しながら、*Aaron's Rod*, *Kangaroo*, *The Plumed Serpent* へと男性同志の結合と男性優位の主張が模索追求される。そしてついに、ロレンス自ら「最も重要な小説」と吹聴した *The Plumed Serpent* において、*Women in Love* の Birkin 以来の主張であった、男性同志の結合が成立し、男性優位の主張が成し遂げられ、男性世界の勝利が謳われたが、それはまた *Women in Love* におけるロレンスの女性観の行き止りから、完全なる女性の否定・女性の自我と魂の抹殺、性の喜びさえも否定したものであった。従って *The Plumed Serpent* は暗い死の影に覆われた作品となっている。

1925年メキシコからヨーロッパに戻ったロレンスは、1930年の死まで、健康を気づかいながら創作活動が続けることになる。死の遠くないことを感じながらの生活の中で、*The Plumed Serpent* のような死の世界で創作の生涯を終りにすることはできなかった。*The Plumed Serpent* で人格も自我も性の喜びも捨てさせられた女性 Kate が、ある意味ではそのまま *Lady Chatterley's Lover* の Connie として登場する。Connie を深く沈んで凍りついた状態・死の世界から甦らせるには (肉体的にも、精神的にも)、それだけ綿密な息を吹き返えらせる過程が必要だったのであろう。ロレンスの生涯を賭けて行き着いた「愛の勝利者」の小説を女性の復活、両性関係の本質・理想への到達点を中心に論じてみたい。

## II

*The Plumed Serpent* の終りは、女性の無・死であった。そうした世界を引き継ぐかのように Connie の世界は空虚で無感覚な死んだ世界として描かれてゆく。ロレンスの小説に現われた女性の中で、Connie, Hilda 姉妹は最も解放された、自由な現代女性としての生い立ち教育を受けている。およそあらゆる点で、リベラルな現代インテリとして申し分のない教養を身につけている。その Connie が第一次世界大戦を経て、ラグビー邸での Clifford との生活の中で、“nothing,” “nothingness” の状態になっている。

Poor Connie! As the years drew on it was the fear of nothingness in her life that affected her.<sup>3</sup>

特に p.52-3 ではこの “nothing”, “nothingness” が繰り返し用いられる。Michaelis と肉体関係を持つてみることも、結局セックスは男の自我主張にすぎないことを知り、厭になって、なんの救いにもならない。人生の意味をすべて失った Connie の世界 (nothing of life, meaningless of life) は次のようにも書かれている。

All the great words, it seemed to Connie, were cancelled for her generation: love, joy, happiness, home, mother, father, husband, all these great dynamic words were half dead now, and dying from day to day.  
... As for sex, the last of the great words, it was just a cocktail term for an excitement that bucked you up for a while, then left you more raggy than ever. Frayed! It was as if the very material you were made of was cheap stuff, and was fraying out to nothing. (p.64)

以後、この死の世界、無の世界から Connie を復活させることが、この小説の一つの大きな中心課題となっている。

無感覚な状態, “... heeding nothing, not even noticing where she was.” (p.60) の状態で、一人森の中を歩く Connie が、毎日森に出掛けるうちに、Mellors が裸になって体を洗う姿を垣間見ることが、Connie の感覚をちょっと揺さぶってみることになる。また、姉 Hilda の強引な勧めで、看護婦の Mrs. Bolton が Clifford の世話をするようになって、Connie は “... she breathed freer, a new phase was going to begin in her life.” (p.87) の状態になれる。自分の自由が持てるようになった Connie は Mrs. Bolton の勧めもあって、森番小屋の裏の黄水仙を見に森へ出掛ける。春の花々が甦り咲き乱れている中で、“Connie was strangely excited in the wood, and the colour flew in her cheeks, ...” (p.88) のように、陽光の中を行くうちに奇妙に興奮し、ほほが色づき、3月の風の中で次のような言葉も彼女の意識の中を通り過ぎる。

Ye must be born again! I believe in the resurrection of the body! (p.87)

このような自然との出会いと平行して、森の中での Mellors との出会いは、鉄砲の音、裸で

体を洗う姿を垣間見ること、そして今度は森に響く金錠の音に引き寄せられて進展してゆく。この金錠の音は秘密の小屋に Connie を導くことになり、この小屋は Connie にとって森の中の中心地点、いかえれば Connie のほとんど消滅していた意識回復の拠り所であるかのように度々そこにやって来るようになる。そこで雌鶏が卵を温める姿を見ることが、彼女に忘れていた女の性命力・母性に気づかせる。Connie は死から逃れようとするかのように毎日雌鶏の所にやって来るうちに、雛の誕生すなわち生れ出た命を見て、生命を実感することで、どっどわき出るように感覚をとりもどし生命感がわいてくる。

Connie crouched to watch in a sort of ecstasy. Life, life! Pure, sparky, fearless new life! (p.118)

雛鶏にさわってみたいという Connie のために、Mellors は雛鶏を親鶏からとりあげて、掌にのせてやると、Connie が涙を落とすくぐりは、生命の温りに触れて、Connie の中にどっどと生が甦った感動の場面である。

Suddenly he saw a tear fall on to her wrist. ... and she was crying blindly, in all the anguish of her generation's forlornness. ...

But then she put her hands over her face and felt that really her heart was broken and nothing mattered any more.(p.119-20)

この後二人は初めて交わりを持つが、それは“a kind of sleep”に過ぎず、堅く閉ざされていた女性の復活までには、肉体的にも精神的にもまだ程遠い。その後、二人の交わりが重ねられてゆくが、その度に新しい場面の展開になっている。創作過程からいって、*Aaron's Rod*, *Kangaroo*, *The Plumed Serpent* と深く沈んだ暗の中から、また Connie の堅く凍りついた状態から本当に肉体的にも精神的にも蘇生させるには、これだけ綿密な、息を吹き返す過程が必要だったのであろう。交わりの度に Connie に起る意識の変化を追ってみると、次のようである。

... : she lay still, and the tears slowly filled and ran from her eyes. (p. 131)

Another self was alive in her, burning molten and soft in her womb and bowels, and with this self she adored him. ... , had opened and filled with new life, almost a burden, yet lovely. (p.140)

It was gone, the resistance was gone, and she began to melt in a marvellous peace. (p.180)

... , and she was gone. She was gone, she was not, and she was born: a woman. (p.181)

But they were together in a world of their own.

It was bitter for her to go on to Wragby.

“I want soon to come and live with you together,” she said as she left him. (p.222)

... , and she came to the very heart of the jungle of herself. She felt, now, she had come to the real bed-rock of her nature, ... (p.258)

こうして、感覚や意識を取り戻し、生命感を取り戻し、女性としての死の世界から復活してきた Connie が妊娠するというこゝで、母性も取り戻した womanhood の復活を完成させている。

こうした Connie の復活と平行して、一方ではずっと現代女性の意志・自我を否定し続けている。それは姉の Hilda や看護婦の Mrs. Bolton, そして Bertha の中で否定的に描かれ、さらに Connie の意識の変化や私の主張が弱められていることである。

### III

*Lady Chatterley's Lover* はロレンスの長編小説の最後のものであり、著者自身もそうなることを予測していたから、作家生活、人間としてあるいは男としての夢があらゆる角度から盛り込まれていると考えられる。ストーリー的なまとまりとしては、ロレンスの作品中最もまとまりのあるものとなっているが、願望や夢を描き過ぎている観があり、男女の自我の相剋までも幻想に包んで終らせている。

ロレンスは1926年12月に Rolf Gardiner に宛てた手紙で、自分の生れ育った Eastwood の土地のことを詳しく説明して、いつかいっしょに歩こうと懐しんでいる中で、ちょうどその一帯が見晴らせる地点に出た所で “That’s the country of my heart.”<sup>4</sup> と述べている。また死ぬ前の年に書かれた “Nottingham and The Mining Countryside” でもさらに詳しく述べて、工業化に汚れてゆくことを嘆きながら “To me, as a child and as a young man, it was still the old England of the forest and agricultural past.”<sup>5</sup> と述懐する。こうしたロレンスの英国を愛する気持は、放浪の後、最後の小説でその舞台を再び英国に戻し、初期の小説 *Sons and Lovers* と同じように Nottingham, Mansfield, Derbyshire といった地域を背景にロビン・フッドの森の名残りで、丘の上から一帯を見渡しながら Clifford に言わせている。

‘I consider this is really the heart of England,’ ...

‘I do! this is the old England, the heart of it; and I intend to keep it intact.’(p.44)

ロレンスの小説には必ずといっていいほど、作者の代弁者のような人物がいるのであるが、それが *Aaron's Rod*, *Kangaroo*, *The Plumed Serpent* とずっと、作者の二面が “doppelgänger” 的に別々の人物に表われていた。*Aaron's Rod* では Aaron と Lily, *Kangaroo* では Somers と Kangaroo, *The Plumed Serpent* では Ramon と Cipriano といったぐあいであった。それが最後にやっと Mellors 一人に落ち着き、少々無理な程に、男性であると同時に指導者・案内者あるいは予言者の役割を果している。方言と標準語を使うといった形で、“doppe-

lgänger”の後遺症が残っているのかもしれないけれども。

炭坑夫の息子に生れたロレンスはフリーダとの結婚もそうであるが、あるいは両親の結婚も似たような形で、いつも上流階級への憧れを懐き、近づいて交際を持っている。この小説では炭坑夫の息子が貴族階級の婦人を完全に満足させるような、階級の差をもまったく乗り越えられる男女の結びつきを成就させている。それこそまさに *Women in Love* の Birkin、いやそれ以前 *The Rainbow* の Ursula と Anton の間にもあった、ロレンスの求め続けた夢が、ここでは「性行為を通じて、男女は人間を超越した宇宙の生命に接する。そこでは男女おのおのの個性といったものは問題ではない。ただ男性と女性とが存在し、この結合が宇宙のリズムと合致する」<sup>6</sup> ということ成就されている。そしてそれは男女の性行為から生れる優しさによるものなのである。それはまた、ロレンスの夢であった無意識の生命感に戻ることや原始生命復帰の思想をも包含している。これは Mellors のいう温い心で愛すればすべてはうまくゆくという言葉で集約されている。

“Yes, I do believe in something. I believe in being warm-hearted. I believe especially in being warm-hearted in love, in fucking with warm heart. I believe if men could fuck with warm hearts, and the women take it warm-heartedly, everything would come all right. ... (p.215)

そして究極的にはロレンスの男性成就の夢を果したわけである。虚弱であったロレンスは強靱な肉体を持つフリーダとの性生活には相当な苦悩があったに違いない。また生涯自分の子供を持つことができなかつたロレンスである。Daleski は “Lawrence was a woman in a man’s skin.”<sup>7</sup> とまで評している。こうしたロレンスが、この小説では大胆にリアルに男根賛美を謳い、終局的には男女に生殖関係を取り戻し、妊娠を称えている。

終幕は階級の差も越え、経済的条件の問題も越え、妊娠して離れ離れに暮していても信頼し合える “forked flame” による両性関係の夢の世界を描いて結んでいる。

#### IV

Connie 像については、Spilka のいう “Constance Chatterley is perhaps the most “lost” of all Lawrence’s lost girls.” であり、また “She is also the most modern.”<sup>8</sup> でもある。ロレンスがそれまで描いてきたあらゆる女性が、そのために苦しみまた闘ってきた、女性の自由・解放への集約されたある姿が Connie にはみられる。しかし別な面での女性としては死んだ状態である。その女性・人間を最後に救えるものは愛であり、Connie が女性として生き返る過程がこの小説であったが、それは両性の理想・本質は温い性の交わりからの満足、またいいかえれば、男が完全に女を満足させること、そして出産へと結実することへの充実感ということであった。こうしたことと平行して、男性権力を優しさという隠れ蓑のもとに遂行してゆく。

ロレンスの考えた「愛の勝利」とは、究極において男性の成就すなわち優しさでオブラートをかけた男根による女性支配であった。女性に社会的地位も、お金も、自我も捨てさせても人生を充足させることのできる両性関係とは phallic tenderness、すなわちそれは force,

dominance-submission problem in marriage に対する、男根による女性支配の終結であった。

ここでもう少し Connie の側から、女性が我を捨てて、救われてゆく過程をみてゆきたい。Hilda, Mrs. Bolton そして Bertha の中にそれまでのロレンスの女性観がみられるが、特に Hilda と Connie の姉妹の対比が面白い。Hilda は “She had the very hell of a will of her own, . . .” (p.248), “Hilda wanted no more of that sex business, where men became nasty, selfish little horrors.” (p.250) そして Clifford は Hilda を “a decidedly intelligent woman, and would make a man a first-rate helpmate, if he were going in for politics for example.” (p.250) とみなし、Connie のことは “more a child” とみている。そしてロレンスはなんといっても、現代女性の自由と知性を身につけている Connie に我を捨てさせ、肉体の交わりによる優しさにカムフラージュされた男性支配の夢を達成する。Connie の二つの自我の間を揺れ動く姿を追ってみよう。

Her old instinct was to fight for her freedom. But something else in her was strange and inert and heavy. (p.138)

Another self was alive in her . . . had opened and filled with new life, . . . (p.140)

It was not the passion that was new to her, it was the yearning adoration. She knew she had always feared it, for it left her helpless; she feared it still, lest if she adored him too much, then she would lose herself, become effaced, and she did not want to be effaced, a slave, like a savage woman. She must not become a slave. She feared her adoration, yet she would not at once fight against it. She knew she could fight it. She had a devil of self-will in her breast that could have fought the full soft heaving adoration of her womb and crushed it. (p.141)

She only wanted her own way. ‘The lady loves her will.’ (p.145)

しかしやがて次のように変化している。

Yet how powerful was that inward resistance that possessed her! (p.180)

. . . It was gone, the resistance was gone, and she began to melt in a marvellous peace. (p.180)

. . . and she was gone. She was gone, she was not, and she was born: a woman. (p.181)

And she moaned with a sort of bliss, as a sacrifice, and a newborn thing.

And now in her heart the queer wonder of him was awakened. A man!  
The strange potency of manhood upon her!(p.182)

It cost her an effort to let him have his way and his will of her. She  
had to be passive, consenting thing, like a slave, a physical slave.  
..., she really thought she was dying: yet a poignant, marvellous death.  
(p.258)

伊藤整は「『チャタレー夫人の恋人』の性描写の特質」において、「作者の性思想の究極の形式化」<sup>9</sup> というが、肉体的には負け犬で、妻フリーダに本当の満足を与えることのできなかつたであろうロレンスの最後に果した夢想の世界で、ロレンスの男性主張を実に巧みに（優しく、温く）、また見方をかえれば、卑劣に勝利に導いた男性成就の小説である。ここに J. M. Murry と Stoll の評を引用してみたい。

For in Mellors, Lawrence is attempting a final justification of himself, and trying to imagine a final triumph of his own defeated masculinity. He represents himself as bringing sexual salvation to a young and naive woman; in fact he is indulging himself with the idea of a final sexual submission of a woman to his divided man. It is his perfect triumph; all that he demanded and did not receive of woman in life is yielded to him. It is the supreme gratification of his male pride.<sup>10</sup>

Directed against Connie's free self, his sexual authority demands obedience: ... Stripped of some of its connotations of the power urge and dressed up in dialect, the male principle of the leadership novels once more emerges, disclosing behind the mask of protective authority the assertion of dominion. Connie's extremely ready submission to Mellors here, as elsewhere, conceals his will to power and prevents it from gaining too obvious an ascendancy.<sup>11</sup>

## V

最後に、「D. H. ロレンス：小説に現われた女性」を締め括るにあたって、一人の作家の作品のある主題のもとに、年代順に追ってゆくことは、そこに一つの人生物語をみる思いであった。ロレンスの主な小説の中に現われる女性の描き方に焦点を当てながら、ロレンスの求めた男女関係の本質を論じてきたわけであるが、6編の拙論は結局人間の一生を男女関係において追うことになった。そしてあたかも一組の男女のあるいは一般的に男女の一生の変遷を垣間見たことに等しい。

一人の男の成長そして自立した人生への出発 (*Sons and Lovers*)、伝統を乗り越えての独立した一個人としての女性の誕生 (*The Rainbow*)、そしてこうした男女が出会って両性関係の理想を追求してゆく (*Women in Love*)。それは男女の自我の闘争・相剋すなわち「両極

性」の中に「星の均衡」を求め、「共にいて自由である」理想を恋愛関係、結婚の場で求めてゆくものであった。しかし、男性の側では男性優位の主張は消し難く、母性に根ざす女性の支配的意志の強さに苦悩する時代が到来する。家族を棄てあるいは妻を無視して、男性世界・男同志の団結を試みあるいは社会的、政治的な成就を求めて放浪する (*Aaron's Rod, Kangaroo*)。このようにして、ファッション的支配—服従による男性世界を創りあげた時、女性は冷く凍って無感覚になっていた (*The Plumed Serpent*)。やがて人生の終りの間近いことを察知して、男女に優しさ、温りによっていかなる外界の障害をも乗り越えられる二人の愛の世界を取り戻し、たとえ離れていようとも信頼し合える永遠の絆を信じる。そしてこうした中にも、男が女を満たし、女はそれに我の主張を捨ててついて行くことが両性の本質だとする男性優位の主張、男のエゴイズムが巧みに織り込まれて結ばれている (*Lady Chatterley's Lover*)。

## Notes

1. Harry T. Moore, ed., *The Collected Letters of D.H. Lawrence* (London: Heinemann, 1970), I, p.173.
2. *Ibid.*, p.170.
3. D. H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover* (Penguin Books, 1961), p. 52. 以後同書からの引用はページ数を本文中に記す。
4. *The Collected Letters*, II, p. 952.
5. D. H. Lawrence, *Phoenix: The Posthumous Papers of D.H. Lawrence* (Penguin Books, 1978) p. 133.
6. 中橋一夫著、『D. H. Lawrence』(研究社, 1965), p. 154.
7. E. M. Daleski, *The Forked Flame: A Study of D. H. Lawrence* (London: Faber & Faber, 1965), p. 13.
8. Mark Spilka, *The Love Ethic of D. H. Lawrence* (Bloomington & London: Indiana University Press, 1971), p. 178.
9. D. H. ロレンス著, 伊藤 整・伊藤 礼訳、『ロレンス』, 新集世界の文学 No. 29, (中央公論社, 1969), p. 351.
10. J. Middleton Murry, *D. H. Lawrence: Son of Woman* (London: Jonathan Cape, 1954), p.367.
11. John E. Stoll, *The Novels of D. H. Lawrence: A Search for Integration* (Columbia: University of Missouri Press, 1976), p.234.